

進捗状況の概要（2 ページ以内）

① 大学改革の加速

平成 27 年度より全学部 1 年次必修科目（薬学部除く）として、1 年次の第 2 学期と夏季休暇期間を中心に学外学修プログラム「武蔵野フィールド・スタディーズ」（以下 FS）を実施している。平成 30 年度は 2,104 人の学生が海外や国内の各地を訪れ、フィールドワーク、地域活性化支援、観光振興支援、地域福祉支援等に取り組み、自身の専門分野と社会とのつながりを体感した。本学では、このようにキャンパスの外に出て、実社会の課題に絶えず向き合いながら、学年が進むに従いそれぞれの専門的な学びを深めていく教育を学びの基本スタイルとしており、1 年次では専門の体系的知識や技術の必要性を感じ、社会性を身につけ、異文化等への理解と寛容の態度を涵養することをメインテーマとしている。平成 30 年度は 97 の FS プログラムを用意した。全てのプログラムには担当教員を配置し、学部学科横断で約 60 人の教員が FS プログラムに参画した。さらに、学外学修時の安全管理のために約 90 人の教職員が引率として参加した。教職員に対しては 5 月に FS 担当教員説明会、6 月に FS 引率者説明会、1 月に FD・SD を兼ねた学外学修シンポジウムを開催し、全学的に教職員を巻き込みながら改革を推進している。各種委員会においても学外学修の検証、分析、報告等を行い、初年次における新しい教育の再構築を目指し、学外学修を大学全体の教育改革事項として位置付けている。

② 事業の実施体制

学内の実施体制については、学長直轄の組織である「教育改革推進会議」とその小委員会、そして、FS の運用全体を統括する学外学修推進センター運営委員会を軸に本事業（教育改革）を推進した。教育改革推進会議では「自立的学習者育成」「アクティブな学び」の具現化を目指し、トライアル授業の運営支援を展開した。また、学外学修プログラム受講者の成績推移や学生生活実態調査等から、成長実感等について検証した。平成 29 年度より設置された FS 小委員会は、平成 30 年度には年 2 回開催され、FS 事業全体に係る課題や令和元年度以降の方針等を議論した。また、平成 30 年 1 月に開設された学外学修推進センターでは、質・量ともに充実した FS の企画と、プログラムの安定的且つ発展的な実施を実現する体制を整備した。センターでは、学外学修推進センター運営委員会を平成 30 年度 5 回開催し、FS 運営に係る課題やその対策、危機管理体制等を議論し、補助金終了後も継続的に運営できる体制を強化した。

③ 事業の実実施計画・継続性

事業の中心となる取組である、全学部 1 年次必修科目（薬学部除く）の FS は、平成 30 年度は長期 FS プログラム数 62、参加者 280 人、短期 FS プログラム数 35、参加者 1,824 人であった。計 2,104 人の学生を学外に送り出し、連携先と協働しながら相互の目的達成に資する活動を実施した。学生は自主的に自らの参加するプログラムを選択し、事前学修では活動先（社会・地域）の背景や課題を学修することで、主体的に活動に取り組む意識と姿勢を養った。そして、そうした事前学修を踏まえて、現地での調査・研究活動を体験し、そこで得た様々な知見を基に、連携先にプレゼンテーション等を実施した。その後、事後学修では、大学祭でのポスター発表や FS 動画・プレゼンコンテスト等を通じて、体験・経験の成果や、課題に対する解決案を言語化し、活動先や社会等に発表することで、多様な人々のなかで、自らの考えを表現・発信する力を高めた。これらの体験・経験が自分の専門の学びの有用性を感じるきっかけとなり、将来のキャリア選択のきっかけとなった例も見られた。また、2 年次以降の FS においては、長期学外学修を通して学科の専門の学びをより深く学修するメインメジャー FS に 7 プログラム、50 人が参加し、学科の専門の学びに加えもう一つ専門を学科横断で学ぶサブメジャー FS に 6 プログラム、36 人が参加した。1 年次だけでなく 2 年次以降に FS プログラムを配置することで、1 年次での学びや能力を昇華させ、体系的且つ実質的な学びに発展させることができた。また、活動先との関係については、担当教職員が現地訪問やスカイプ等で定期的に打ち合わせを行い、互いのニーズを確認したうえで信頼関係を深め、FS プログラムを改善しながら構築した。更に、

学外学修前の事前授業を教員が主体的に実施することでプログラムの質が保証され、連携先へのプレゼンもより効果的なものとなり、互恵的且つ継続的な協働体制が構築されている。

補助期間終了後の継続発展に向けた取組については、学長直轄の組織である教育改革推進会議と、平成 30 年 1 月に設置した学外学修推進センターを中心に、現状の課題である①プログラムの質保証、②科目履修の学内調整（特に第 2 学期）、③規模に応じた運営推進の教職協働体制の整備、④FS 活動先の開拓等、の解決を図りながら、全学的な特色ある取組として発展的に FS を推進していく。特にプログラムの質保証については、事前・事後の学修が重要であると考え。事前学修では「主体的な学修態度」を涵養し、学外学修の様々な体験・経験から世界や社会の現実や課題を感じ、事後学修にてそれらの体験・経験が全て「学びへのきっかけ」となることに気づかせる。更に、事後学修の成果発表等では仲間と協働しながら、思考力や判断力、表現力を培い、自らアクティブに学修する力を養っていく。これらの事前事後学修を担当教員が主体的に行うとともに、活動先とのプログラム開発・改善会議や FS 研修（シンポジウム）等を通じてプログラムの検証を行い、教育 PDCA を回していくことで、継続的なプログラムの質向上を目指していく。なお、補助期間終了後の令和 2 年度についても、FS が全学部 1 年次必修科目（薬学部除く）として実施することが教育改革推進会議にて決定している。

また、学外学修時の学生の活動資金の負担軽減の取組については、特に高額な参加費用が必要な海外の長期 FS に対しては、活動地域や成績により大学から奨励金を支給する仕組みを構築した。国内の FS については、活動先の地方自治体から宿舎や移動手段の提供が受けられるように、活動先にとってもより効果的で有意義な取組と成果発表、提言を行い、活動資金の負担を軽減していく。

④ 事業成果の普及

事業成果の普及については、学内において、全学的な FD を年 4 回実施し、各学科での授業改善の取組等について共有した。併せて 1 月に公開シンポジウム「ギャップイヤーからフィールド・スタディーズへ～プログラム最終年度に向けての現状報告～」を実施し、その報告と成果の一部は、「平成 30 年度学外学修プログラム事業報告書」に記載し、学外への成果の発信を行った。また、学生が活動中に Facebook に取組内容を掲載し、その Facebook を本学ホームページ上へ公開することで、学内外のステークホルダーの当該取組に対する理解を促進した。学外学修後は大学祭でポスター発表や FS 動画・プレゼンコンテストを実施し、大学近隣地域の方々や高校生、他大学の学生に取組みを発表した。更に、FS 活動先の方々が地域の特産をアピールするために大学祭で出店し、大学近隣地域の方々にその地域と地域の特産、大学の取組みを周知した。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

前述したとおり、本学では、キャンパスの外に出て、実社会の課題に絶えず向き合いながら、学年が進むに従いそれぞれの専門的な学びを深めていく教育を学びの基本スタイルとしており、1 年次の FS では専門の学びの有用性を感じ、社会性を身につけ、異文化等への理解と寛容の態度を養っている。2 年次以降は、1 年次での学びや能力を昇華させるため、メインメジャーFS 及びサブメジャーFS による、専門的な長期学外学修プログラムを配置し、体系的且つ実質的な教養と専門の連続した学びを展開している。これらの取組を中核にして更に大学全体で教育改革を実現するため、平成 30 年度より高校以前の段階での長期学外学修の経験を出願資格とした「武蔵野 FS 入試」を導入した。これにより、当該学生（令和元年度入学生）は 1 年次の FS への参加がより主体的になり、担当教職員等と意見交換することで学生本位のプログラム構築に寄与するであろうことが期待される。また、4 学期制の導入により、2 学期及び夏季休暇期間の FS や語学研修、海外留学等の学外学修が促進され、主体的な学びを深めていく機会が増加した。その他、学外学修の効果については、継続的に、FS プログラム受講者の成績推移や学生生活実態調査等から成長実感等を検証しているが、今後は、平成 29 年度より 1 年次の長期 FS を本格導入したため、令和 2 年度卒業生の参加 FS、入試区分、成績、適性、進路先等を調査・分析することで、出口に対してより効果的な学外学修の在り方を検証し、学外学修の意義や位置付けを再度確認し、全学的に共有していく。これらの取組により、入口から出口までの質保証の伴った大学教育改革を全学的に推進していく。

（テーマ：Ⅳ、大学等名：武蔵野大学）